

花壇で鎮魂の山を華やかに

山田ロータリークラブを訪ねて（第2520地区・岩手県）

モノクロの世界がカラーの世界になったよう

5月26日。今日は、山田ロータリークラブ（RC／第2520地区、会員15人）と名川RC（第2830地区、会員14人）との合同例会。岩手県山田町中心部にある御藏山に合同で花壇を作ります。御藏山には、町営の共同浴場と、「鎮魂と希望の鐘」（横組みP48～50参照）、そして1971年、山田RC5周年時に寄贈され、40年にわたりJR陸中山田駅の駅舎で町民を見守り続けた大時計が保存され、山田湾を見下ろしています。山田町は津波後、火災にも見舞われました。時計は焼け焦げ、針は津波の襲った3時27分を指して止まっています。

午前11時、名川RC会員と名久井農業高校インタークトクラブ会員総勢約40人を乗せたバスが御藏山に到着。花壇作りは高校生たちのおかげで手際よく進められました。3年生の指示でサルビア、マリーゴールドなど、約1,000個のポット苗を植えます。一緒に植えながら、山田RC会員が高校生たちに昨年3月11日のことを話す場面も見られました。作業後は、並んで鎮魂の鐘を鳴らしました。大きく澄んだ音が海に響きます。

「花を植えていただき、あの丘がモノクロの世界からカラーの世界になったような感じで、本当に良かったです」。植樹後の例会で、阿部幸栄会長はあいさつしました。例会場は、4月30日に共同仮設店舗で店を再開した「三陸味処 三五十」。今日はここを会場にした初例会でもあります。50人も入れれば満員ですが、現在の山田町では、

民間では一番広い「ホール」とのこと。別の場所にあった店舗は、津波と火災で焼失。創業58年、父親から店を継いだ代表の大杉繁雄会員が、被災直後の心境を語りました。「もう本当にがっくりしてしまって、立ち上がりませんですよ。それで『がんばる』といつてもね、全然その『がんばる』の意味がわからない」



大杉繁雄さん

昼食中、大杉さんは15年前から岩手アカモク生産協同組合と協同で研究を続けてきた天然海藻「アカモク」の佃煮を紹介。栄養価が高く、医薬品への研究も進んでおり、アカモクへの注目度も高まっています。昨年3月17日にお披露目の予定が震災で全てを失いましたが、組合の冷蔵庫に残っていて、9月に「岩手県ふるさと食品コンクール」に出品したところ、最優秀賞を受賞。それから大阪をはじめ各地を飛び回り、今はイベント出店などで奔走の日々だそうです。

事務局、例会場全壊……ロータリーどころじゃない

山田町は東日本大震災で死者・行方不明者771人、被災家屋3,367棟（46.7%）という甚大な被害を受けました。山田RCは、会員15人中14人が被災し、家



阿部幸栄会長



東日本大震災



族や職場の従業員を失った会員もいました。例会場は全壊、事務局も津波後の火事で全焼。資料は「個人がたまたま持っていたものが無事」という状態で、公的なものはすべて失いました。阿部会長の自宅は幸い残りましたが、職場を失いました。震災から約1週間後によくついた町役場の仮設電話からガバナー事務所に電話し、休会を申し出ましたが、当時の榎山直樹ガバナーから「支援するから、クラブを続けてください」と要望されました。しかし、事務所も例会場もありません。「ビックリしたのは、通帳のコピーを見たら、残高が6,000いくらだった。『何これ!』って」

「とりあえず振り込むから」と、姉妹クラブの東京浅草RC（第2580地区）が約130万円を送ってくれ、ガバナー事務所からも義援金がきて、そこで「これでできるな」と思ったそうです。「あれがなかったら、まさにクラブの存続自体がダメだった。『ああ、これでもう終わりだな』と思いましたもの。ロータリーどころじゃないっていうのが本音でしたから」

被災直後は全国から多くの物資が届けられ、助けられながらも、応対に戸惑う場面もあったそうです。「電話が来て『〇日に行きます』。で、トラックで乗り付けてきて、『はい、どうぞ』と。それを配るのも大変なん

山田RC元来のバナー（左）は震災で失ったが、事務局の女性がたまたま一枚持つていたため再印刷できた。右は「鎮魂と希望の鐘」がデザインされた限定版



すよ。（ロータリアンを助けるのはロータリー的でない、という考え方もありますが）それは確かに一つの原則論だとは思うけど、うちの会員の半分は自宅も職場も失って、まさにロータリアンが被災者なんです。物資を持ってきて『さあ山田RCの皆さん、これを配ってください』と言われても、『こっちは被災者だ』と言いたいけれども、なかなか言えない

被災後、最初の例会は、盛岡北RCと合同で炊き出しを行った6月5日。その後もいろいろなクラブの来訪を受け、月1~2回、不定期に、主に野外で例会を開催。外部のクラブが、山田RCと連携して地域に物資を届けるかたちの支援が続きました。

『やまだの作文』第40集は復興メモリアルに

「お父さんが帰ってきたのは、しんさいから二日後のお昼ごろでした。お父さんの手首とせ申には、けがをして血を流したあとがありました。お母さんは、お父さんを見てないでいました」（豊間根小学校3年生）

山田町内の小中学生の文集『やまだの作文』は山田RCの長年の継続事業で、偶然、今年2月発刊の号が第40集となる記念号でした。クラブで協議の結果、「このようないときだからこそ、大震災後のメモリアルとして『やまだの作文』だけは必ず発刊しよう」と決めました。

「ただ、『この時期、子どもたちに作文を書かせていいものかどうか?』と。で、先生方に相談したら『いや、大丈夫でしょう』と。そのかわり、テーマや例は『家族』『学校生活』『将来の夢』などにして、震災のことは一切入れないようにしました。被災していない学校もありますからね。しかし、結果的に3分の1強の子どもたち



が津波のことを書いてきたんです。予想通り、結果としてメモリアルになったんです」

この特別号を全国のロータリアンに読んでほしいと、1万部を刷り、全クラブに送ることにしました。予算は例年の10倍。印刷費、運送費、贈呈式など約300万円の資金は、地区、東京浅草RC、大阪金剛RC（第2640地区）、藤岡南RC（第2840地区）などの協力で集まりました。発刊後は全国紙に載り、マスコミにも取り上げられ、予想を超えた反響があったとのこと。

「今回、被災直後から多くの支援を受けて、あらためて『ロータリーの存在は偉大だなあ』と実感しましたよ。スピード感と、パワーがあったし。パワーというのはお金という意味でね。ロータリーってどこかでいい加減だというのは無きにしもあらずだったけれども（笑）、今回ほどその存在を実感したことはないですね」

4月、仙台での地区大会には、15人中10人が参加。「やっぱり全国の皆さんからの支援があってクラブが存在しているわけだから。参加自体が恩返しの一つの具体的なたたちだから、出よう、と」。『やまだの作文』事業でクラブは「ガバナー特別賞」の表彰を受けました。

人やお金が循環して初めて、全体の復興になる

今まで、会費を徴収せずにクラブ運営をしていますが、今後のことになると、阿部会長の顔は曇ります。「会費を取ると辞めると言う人も出るかもしれません、私を含めて（笑）。震災前の状態を100とすると、戻ったのはいいところ60レベルです。30の人もいるでしょう。そういう中でやっぱり会費は取れない。でも次年度のことは相談しないといけない。正直、全国からの義援金でクラブを維持している状況です。でも、いつまでも義援金に頼るわけにはいかないだろうから、どうすればいいのか」。会員が集まること自体が大変なので、今後も例会は不定期開催が続くようです。

これから復興で最も必要なものは？ 「実感として、やはり現金です。物資支援はそれはそれで大変ありがたいのですが、物資だと、その地域で買い物をしないので、地域でお金が回らない。地域でお金が回ってほしいわけです。物資支援なら、現地で調達してもらえば、結果として二重、三重に潤います」

山田町には、新しいホテルもできつつあるそうです。「山田町に来ていただき、この『三五十』のような再開



した食堂で食事するとか。やっぱり人やお金が動いて、循環して初めて、全体の復興になる。ロータリーで動いて、その間に誰かがはまっていって、そこに経済効果が出る。まさに、職業奉仕なんですよ」

全国のロータリアンに今、こうしてほしいというものありますか？ 「『これです』とはなかなか言えないですが、戻るようですがやはりお金。お金があれば必要なときに、必要なことができます」。

会員身分維持のための継続的、かつ具体的な支援も必要とのこと。「例えば人頭分担金が今後も全額免除されれば、それだけクラブからの支出がなくなるので、実質的な支援になる。それに『もらう』ことで活動すると、どこかで後ろめたさがないわけではないが、公的に『免除』してもらえば、どこかで後ろめたさも薄くなり、それも実質的な支援になります。正直、そういう思いがあります」

本格的な街づくり開始は数年後

今回の御蔵山での花壇作りは、名川RCの提案で実現したもので、名川RCは5か年計画で植樹を継続予定です。閉会あいさつで、阿部会長は述べました。「たぶん、1年後も町並みはあまり変わっていないのでは、と思います。復興は5年、10年というスパンになろうかと思います。毎年来ていただいて、変化を感じ取っていただければ、ありがとうございます」

「三十五」の外も、御蔵山周辺もまだ、建物の土台だけが残されたでこぼこの大地に、営業を再開した仮設店舗などが点在する光景が広がっています。山田町の防潮堤（9.7m）の完成が5年後。来年、沿岸地域のかさ上げ工事が始まり、本設の街づくりが始まるのはそれ以降です。全国ロータリアンからの、息の長い支援が求められています。

*文中の役職は、当時のものです。

取材協力：大島 達治（友地区代表委員、仙台RC）

取材：編集部 山名 愛

東日本大震災